



Title	Investigation of the possible role of glycosaminoglycans and sialic acid in urine in calcium oxalate urolithiasis
Author(s)	吉村, 一宏
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41213
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	吉 村 一 宏 よし むら かず ひろ
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 0 3 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 10 年 4 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	Investigation of the possible role of glycosaminoglycans and sialic acid in urine in calcium oxalate urolithiasis (蔞酸カルシウム結石症における尿中グリコサミノグリカンおよびシアル酸の果たす役割についての研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 奥山 明彦 (副査) 教 授 堀 正二 教 授 祖父江憲治

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

ヒト尿中には、おもな高分子物質として糖蛋白のほかにムコ多糖であるグリコサミノグリカン (GAG) が存在し、これら高分子物質の中にはアミノ糖の一種であるシアル酸が含まれていることが知られている。シアル酸は尿中では尿中高分子物質の構成単位の一つとして存在するものと遊離型のシアル酸として存在するものとがあると考えられている。また、蔞酸カルシウム結石中に含まれるマトリックス成分の中にもこれらの高分子物質が含まれている。蔞酸カルシウム結石は結晶の核形成、成長、凝集の段階を経て形成されと考えられているが、われわれは蔞酸カルシウム結石形成における尿中 GAG およびシアル酸の果たす役割を明らかにすることを目的として以下の検討を行った。

【方法ならびに成績】

健常成人男子全尿を濾過したのちこれに塩化カルシウムおよび蔞酸ナトリウムを添加し、全尿中で蔞酸カルシウム結晶を生じさせ、われわれが既に報告している方法により尿中蔞酸カルシウム表面吸着物質 (CSBS) を作成した (Urol Res 18, 387-392, 1990)。このようにして得られた試料を GAG 分解酵素のひとつであるヘパリチナーゼで GAG 成分を消化分解した。GAG 消化分解後は低分子分解物を除去し凍結乾燥させてヘパリチナーゼ消化後の試料とした。また、これとは別にシアル酸の分解酵素であるシアリダーゼを用い緩衝液中で CSBS と反応させ同様に凍結乾燥し試料とした。さらに CSBS の一部は酵素を使用し蛋白成分を分解した。

酵素分解前後での CSBS について seed crystal 法に準じ in vitro での結晶成長阻止能を ^{14}C 標識蔞酸を用い測定比較した。また、これらの試料中に含まれる蛋白量、GAG 量についても測定した。ヘパリチナーゼ消化前後での CSBS についてはイオンクロマトグラフィーをおこない、各フラクションの蛋白量、GAG 量を測定した。

つぎに、健常成人男子と成人男子蔞酸カルシウム結石症患者各々15例の全尿について、尿中のシアル酸を比較検討した。健常成人男子の年齢は24歳から41歳まで平均33歳、男子結石症患者は21歳から69歳まで平均45歳であり、各々の症例について24時間蓄尿をおこない尿中の総シアル酸濃度、1日のシアル酸排泄量、結合型および遊離型のシアル酸の比率、in vitro での結晶成長阻止能を測定した。

ヘパリチナーゼ消化により CSBS 中に含まれる GAG 量は消化前の約25%に減少した。ヘパリチナーゼ消化前後のイオンクロマトグラフィーを比較すると蛋白量に大きな変化はなかったが、GAG 量はヘパリチナーゼ消化により低下し、消化後は一部に小さなピークを認めるのみであった。CSBS の蓚酸カルシウム結晶成長阻止能をヘパリチナーゼ処理前後で蛋白濃度別に比較すると消化後に阻止活性が約20~40%低下した。プロナーゼ E による蛋白分解によっても CSBS の蓚酸カルシウム結晶成長阻止活性は低下した。さらに、ヘパリチナーゼおよびプロナーゼ E の 2 つの酵素で CSBS を処理した場合、蓚酸カルシウム結晶成長阻止活性は低下するものの高濃度では十分な阻止活性が認められた。

この 2 つの酵素による処理後も阻止活性を示す GAG を同定するためにイオンクロマトグラフィーで GAG のピークとして認められたフラクションについて HPLC を用いさらに検討を加えたところ、デルマトン硫酸の特異的消化酵素であるコンドロイチナーゼ B を用いた場合に明瞭な不飽和二糖のピークが認められた。

CSBS 中には 10 mg あたり 90 μ g のシアル酸が含まれていたが、シアリダーゼ処理前後で蓚酸カルシウム結晶成長阻止活性に差はみられなかった。また、健常成人男子と成人男子蓚酸カルシウム結石症患者の全尿での 1 日シアル酸排泄量、尿中シアル酸濃度ともに両群間に有意差を認めなかった。全尿中総シアル酸のうち遊離型シアル酸の占める割合は前者で 58.4%、後者で 50% であり有意差はみられず結合型、遊離型シアル酸ともに蓚酸カルシウム結晶成長阻止活性を示さなかった。

【総括】

蓚酸カルシウム結晶表面に吸着する尿中 GAG はおもにヘパラン硫酸であり、強い蓚酸カルシウム結晶成長阻止作用を示したが、わずかながらデルマトン硫酸も含まれており、デルマトン硫酸も単独で結晶成長阻止作用を示した。

尿中に含まれるシアル酸には蓚酸カルシウム結晶成長阻止作用がなく、健常群と結石症群とのあいだに差がないことから、蓚酸カルシウム結石形成には積極的には関与しないことが示唆された。

論文審査の結果の要旨

ヒト尿中には、高分子物質として糖蛋白のほかにもコ多糖であるグリコサミノグリカンが存在し、これら高分子物質の中にはアミノ糖の一種であるシアル酸が含まれていることが知られている。本研究は蓚酸カルシウム結晶成長過程において、尿中グリコサミノグリカンのうちヘパラン硫酸がもっともよく蓚酸カルシウム結晶成長を阻害することを明らかにした。また、デルマトン硫酸も結晶成長阻止作用を有することを示しており、尿中シアル酸については結晶成長阻止作用がないことを示唆している。尿中のグリコサミノグリカンのうちヘパラン硫酸とデルマトン硫酸がおもに蓚酸カルシウム結晶成長に阻害的に作用することを明らかにした意義は大きく、今後の尿路結石症の基礎的研究を進めてゆくうえで重要な業績であり学位の授与に値するものと考えられる。